

8007 昔の小学生にとって、鉛筆を小刀で削ることは

昔の小学生にとって、鉛筆を小刀で削ることは重要な自己学習であった。掛け算の九九を覚えるのと同じ、あるいはそれ以上の意味をもっていた。彼らは感覚を通じて木を知り、その香りをかいだ。それは原始の洞窟の中で、父や兄の作業を見よう見まねで矢を削り、弓をつくっていた子供たちと共通する経験だっただろうと思う。

村松貞次郎『大工道具の歴史』（岩波新書）

[許容訳例]

For schoolboys in former days, it was an important part of self-education to sharpen a pencil with a knife. It signified the same as, or more than, learning the multiplication table by heart. They came to know the wood through their senses, by smelling its odor. I feel this was an experience shared with the boys of primitive times who sharpened arrows and made bows by watching their fathers and big brothers making them in the caves

[翻訳例]

For schoolboys in former days, learning to sharpen a pencil with a knife was an important part of self-education. It had a significance equal to, if not greater than, learning the multiplication table. They got to know the wood, the very smell of it, through their senses. Their experience, I feel, had much in common with that of boys who learned to fashion arrows and make bows by watching their fathers and elder brothers at work in the caves of primitive times.

■昔の小学生にとって、鉛筆を小刀で削ることは重要な自己学習であった。(8007)

★「昔の」は in former days です。of former days より自然です。なお、former days の代わりに former times も使えます。the old days は「古き良き時代」というノスタルジアが入ってしまいます。

★「小学生にとって」は for schoolboys がいいでしょう。ここでは学年が話題になるわけではないので elementary とか primary を入れない方が自然です。それから、下の方で、小刀や父や兄など、男を中心にしている話なので schoolboys がいいと思います。

★「鉛筆を小刀で削る」は sharpen a pencil with a knife です。

★「自己学習」は self-education（自分を educate すること）です。self-learning は「自分を知ること」という意味で、駄目です。それから、「重要な」という形容詞がついていることからわかりますが、「鉛筆を削ること」が「自己学習」のすべてではなく「自己学習の一部」ということです。self-education は抽象名詞で数えられないので「重要な自己学習」は an important part[item] of self-education です。

◆不定詞と動名詞（鉛筆を削ること）

「鉛筆を削ること」を to sharpen a pencil（不定詞）にするか sharpening a pencil（動名詞）にするかですが、動名詞は「過去からいつもそうであったこと」(e.g. Seeing is believing.)

を表し、不定詞は「これからする一回のこと」(e.g. To see is to believe.)を表しますから、ここでは sharpening a pencil with a knife を使う方が better です。

■掛け算の九九を覚えるのと同じ、あるいはそれ以上の意味をもっていた。(8007)

★「掛け算の九九」は the multiplication table(s)です。なお、英国の九九は two twos are four, two threes are six, two fours are eight, …から始まって twelve twelves are one hundred forty-four まであります。

★「掛け算の九九を覚える」は learn[get] the multiplication table(s) (by heart)です。他に memorize という動詞も使うことができます。

★「(それは)・・・と同じ」は equal to…; the same as…です。なお、the same as…の same は形容詞ですが、as は前置詞(His car is the same as mine/ Frozen peas taste much the same as fresh ones), 接続詞(This is the same as what I learned yesterday.), 関係詞(This is the same as I learned yesterday./ The patient's condition is the same as it was yesterday.)として使われますから、「・・・と」をどういう形で表すか問題になります。

★「それ以上」は more than…; greater than… です。

★「(それは) 意味をもっていた」を It meant…とするのでは弱いと思われます。ここの「意味」は、たとえば、Hana means flower.というような場合の「意味」ではなく、「意義・重要性」に近いと思われます。したがって、It signified…とか It had a significance…とかの方が適当です。

●「・・・と同じ、あるいはそれ以上の・・・」

「掛け算の九九を覚えるのと同じ、あるいはそれ以上の意味をもっていた」のところは、英語的に言いうと、「掛け算の九九を覚えること」を「・・・と同じ(equal to; the same as…), 「・・・をあるいはそれ以上(more than; greater than…)」のどちらにも通じる形にして It signified に続くようにしなければなりません。to; as; than はいずれも前置詞としての使い方もあるので、ここは learning…と動名詞にすれば、たとえば、It signified the same as, or more than, learning the multiplication table by heart.あるいは It had a signification equal to[the same as], if not greater than, learning the multiplication table by heart.と続けることができます。なお、if not は形容詞や副詞の前に置いて「・・・ではないにしても ; ……とまでは言えないにしても」(e.g. His behavior is rather strange, if not abnormal.彼の振る舞いはちょっと変だ、異常とまではいえないけど。)という意味で、but not…に近い連結辞です。辞書には、She has a necklace that is attractive, if not valuable. (高価ではないにしてもすてきなネックレスを持っている)と例を挙げて「この if not は but not に近く unless では置き換えられない」と注が付けてあります。

■彼らは感覚を通じて木を知り、その香りをかいだ。(8007)

★「感覚を通じて」は through their senses でしょう。

★「木を知る」は get to know the wood とか come to know the wood です。Know は「知っている」という状態動詞なので、その発端を get to や come to で示さなければなりません。

★「その（＝木）香りをかぐ」は smell its odor ですが、「かぐ」も感覚の一つですから、どう処理するかが問題になります。

●「・・・連用形＋・・・した」→「主動詞＋句（具体例）」

「感覚を通じて木を知り、その香りをかいだ」は「順次」として and で連結してもいいように思われますが、「かぐ」も感覚ですから and でつなぐと非論理的な変な英語になってしまいます。「彼らは感覚を通じて木を知った」で完結しているのにどうして筆者は「その香りをかいだ」と加えたのか推察すると、筆者はおそらく「感覚を通じて木を知る」では具体性に欠けると感じたのでしょう。したがって、本当は「感覚を通じて、たとえば、香りをかいだりして、木を知った」と言いたかったのだらうと考えられます。そうすると、この文の構造は「・・・して・・・した」ですから「主動詞(got to know)＋句(by smelling...)」で、処理すると「句」で具体例を示すことができます、「・・・して・・・する」の中で[して]が「順次」ではなく and で変換できない文があります。たとえば、

彼は帽子をとって挨拶した、→He greeted me by taking off his hat.

両親は田舎に住んでいて、牛を飼って生活しています。→My parents live in the country, and they make a living by raising cattle.

彼は草を食べて命をつないだ。→He survived by eating grass.

など「二動作一体」の場合です。これらは「主動詞＋句」で変換するのですが、「句」の正体は「具体例」です。それで、ここも They came[got] to know the wood, through their senses, by smelling its odor.と処理するのです。もう一つの方法は、「木」と「その香り」を同格・具体化と解釈して、They got to know the wood, the very smell of it, through their senses.と処理することも出来ます。

■それは原始の洞窟の中で、父や兄の作業を見よう見まねで矢を削り、弓をつくっていた子供たちと共通する経験だっただろうと思う。(8007)

★「原始の洞窟の中で」は in the caves of primitive times です。

★「父や兄の作業を見よう見まねで」は「父や兄が作業しているのを見て」ということから by watching their fathers and elder brothers at work とか by watching their fathers and big brothers making them (in the caves)です。「見よう見まね」を辞書で調べると、going by another's example と出ています。これを使うなら going by the example of their fathers and big[older] brothers となります。なお、going by の代わりに following を使うと、「見よう見まね」が消えて、「お父さんや兄さんが作ったので自分も作った」となり、必ずしも同じ作り方とは限らなくなります。また imitating を使うと「お父さんや兄さんと同じ手順で」という意味になります。

★「矢を削り、弓を作った」は、そのまま処理すると sharpened arrows and made bows ですが、sharpen は「鉛筆を削る」に使ったので fashioned arrows としてもいいでしょう。なお、ていねいに処理するなら learned to fashion arrows and make bows by watching...です。

●「連体修飾節＋不定代名詞的名詞」（見よう見まねで矢を削り、弓をつくっていた子供た

ち)

「見よう見まねで矢を削り、弓をつくっていた子供たち」は「連体修飾節＋不定代名詞的名詞」ですから「名詞(the boys)＋関係詞節(who learned to…)」で処理することになります。

★「(それは…)と共通する経験だった」の「…と共通する」に相当するのは、英語では the same as…か have much[a lot] in common with…しかないでしょう。the same as は「完全に同じ」ということであり、have much[a lot] in common with は「共通のところがある」ですから、ここでは後者を使って This had much[a lot] in common with the experience of…か Their experience had much[a lot] in common with that of …とするかでしょう。なお、This was a common experience to the boys…とすると「子供たちはみんな同じ経験を持っていた」という意味になってしまいます。common to というのは「一つのグループがあって、そのグループのメンバー全員に共通なものである場合」、たとえば、Japanese nationality is common to the members of this class.のように全員が日本人だというような場合に使うものです。

★「…だろうと思う」ですが、ここでは I think は不適当です。think というのは、「一つの事実に対して、こうだと思っている」、つまり、確乎たる事実を踏まえて断言する」という感じで、自分の意見としてある程度自信をもっている言い方です。日本語の「思う」とは合わない場合が多く、まして、ここでは「…だろうと思う」ですから「確かではないけれどもこうじゃないだろうか」ということです。したがって、I feel…です。I feel は日本語の「だろうと思う」とか「ではないでしょうか」にぴったりです。それから、I think とか I feel は先頭に置くのではなく、一般的には one phrase の後に、ここでは Their experience, I feel, had…とするのがいいと思います。